2023年1月15日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

罪の赦しを頂いて

［ルカによる福音書5章17～26節］

ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒涜するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われた。その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った。人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

[１]　他者の存在によって

私は、二日前の金曜日の夜におかしな夢を見ました。起きる直前の夢だったので覚えているのですけれども、こんな夢なんです。

あるクリニックの広い診察室に、女医が一人と、診察を受ける老若男女が7、8人順番待ちをしているのです。そして身体が不自由になって固まってしまっている人の治療になった時、何とその医師が「みんな手伝って下さい」と呼びかけるんです。すると、その診察室にいた病人たちが何か当たり前のように立ち上がってそのお医者さんに並びます。何が始まったかと言うと、その女医さん、「じゃあ、皆で気を送りましょう！せ～の！」と言うんです！私はびっくりして見ているんですが、診察室の皆それぞれが、握りこぶしをしながら目をつぶって力を注いでいるのです。私は、それを見て、何故か泣いているのです…。何でこんな夢を見たのか分からないのですが（大体夢と言うのは支離滅裂ですよね）「気」なんてキリスト教の礼拝で言うのも、ちょっと怪しげで、本当にへんてこな夢なのですが、不思議と心が動いてしまったんですね。それは、今日の聖書箇所とも関係があるようなこと―ある人の癒しのために、周りの人間の力も、神様・イエス様（真の霊的な医者）と「協働」して働くということがそこに起こっていたからなのかもしれません。

今日の聖書の箇所ですが、これは私たちの物語ではないかと思いました。まず私たちは皆、病人だということです。病人というのは、自分で自分の病から救えない者です。そうですよね？ここでは中風を患っている者です。この人は今自分の足が効かないのです。自由に歩ける時、健康で丈夫であると思っている時は、自分の中の「弱さ」が分かりません。けれども今彼は、周りの他者によって運ばれるということ、つまり「弱さ」を受け入れ、そしてイエス様のもとにやって来ることが出来たのです。そして、癒された。病人であるからこそ、自分の弱さを認め、イエスによって癒された、救われたのです。そしてこの物語は、一人の人の救いのためには、何人もの人たちの無私の心と「協働」が背後にあるということを教えてくれているように思うのです。

今私たちがこのように教会に導かれているということ、またバプテスマを受けたということ、それが全く自分だけの力や求めや努力によったのだと言える人は一人もいない筈です。色々な人との関係や、書物やコンテンツの導きによって導かれてきたこともあるでしょう。そして、私たちが主のもとに来ることが出来ているというのは、意識している・いないに関わらず、その背後に「気」ではないですが、「祈り」があるのだと思います。知らない人の祈りも、国や時代を超えた祈りも、時に適って叶えられるということもありますよね。私たちは実は、気付かないだけで、私たちを生かそう、助けようとしている愛に囲まれているのではないでしょうか？そして、それは、根本的には、私たちを救おうとして止まない神様のみ心に由来しているのではないでしょうか？神様の思いと、人の愛のわざは救のために「共に働く」力となるのだと思います。

［2］ 「常識」に阻まれないで

確かに先週読んだサタンの誘惑の話（ルカ4章）ではありませんが、この世の力は巧みに、或いは「常識」という名のもとに、私たちが神様と繋がることを阻もうとすることがあると思います。「神様？それは幻想なんじゃない？信じたら結局バカを見るよ」と。しかし、この物語の男たちは、その声を突破しています。常識の壁に跳ね返されませんでした。群衆が遮っているのなら、出来る方法でこの中風の者をイエス様のもとへ連れて行こう！と、屋根の瓦を剝がし、上から床に寝かせたままこの人を吊り降ろしたんです。愛は常識を超えて行くのですね。ある意味、開かれていた集会は目茶苦茶状態です。しかしイエス様は、これを喜ばれたのです！そうとしか読めません。そしてこう記されています。「イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた」（20節）。驚くべき言葉だと思います。ここに、一人の人の全人的救いが実現したのです。この中風の病人は特に何もしていないように見えます。いや、それは正確ではありませんね。彼は、周りの人の信仰に自分自身を委ね、そしてもっと大きな愛の源であるイエス様の前に身を晒したのです。彼は「動けない」訳ですよね。それが或る意味良かった。私は思いました。救いというのは、イエス様の前から逃げられなくなくなることなのだと。退路を断つということです。イエス様の愛にすっかり捉われること、イエス様の愛の中に沈められることです！あのバプテスマとはそういうことなのだと思いました。

［3］ 罪の赦しから、賛美の人生の扉が開く

「人よ、あなたの罪は赦された」。これは、私たちがやがて神様に前に立たされる時、十字架の贖いを成し遂げて下さった弁護者である主イエス様が、私たち一人ひとりに語って下さる言葉であるに違いありません。その言葉を、宣言を、もう私たちは生きている内に受けたのです！私たちは、生き続けていく中で、何が心にこびりついて離れないかと言えば、やはり自分の罪だと思います。誠実であればあるほど自分でも自分を許さないものが思い出されるということがあるのではないでしょうか。それは自分を責めます。逃げ場はありません。でも私たちは、吊り降ろされてイエス様に前に導かれ、「子よ、あなたの罪は赦されました！」という声を聞くのです。そこが新しい賛美の人生の始まりです。ですから、この中風だった者は、罪が赦された後、今度は24節でイエス様に「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われて立ち上がり、神様を讃美しながら家に帰って行ったと記されています。体が癒されたということは、おまけのようなものです。もっと大きな奇跡は、讃美する心が沸き起こって来るという聖霊のわざが罪人に与えられるということです。私たちが礼拝を捧げ、共に賛美をしているという現実、これが奇跡でなくて何でしょうか！イエス様の愛を受け入れられない律法学者やファリサイ派の者たちは、自らを正しくするが故、自らの救いを閉ざしてしまっています。

さて、この屋根の瓦を剥がされた家ですが、その後どうなったでしょうか？ある牧師がメッセージで語っていた言葉が私は忘れられません。それは、この屋根を剥がした男たちは、そのあときっとまた皆で集まり、喜んで修復工事をしただろうと。もしかしたら、歩けなかった男も、今はその仲間に加わっていたのではないだろうかと。イエス様は、私たちの、愛に根ざす信仰を喜ばれるお方です。そして、私たちの思いを超える御業をなして下さいます。イエス様は生きておられますから！確かに人生、悲しいことも起こってくるかもしれない。しかし、どのような時もこのイエス様に信頼してゆきたい。新年が始まり、私たちの教会も、また皆さんお一人ひとりの生活も、神様の励ましを受けながら、天の開いた窓を仰いで行く歩みが出来ますように。私たちは、イエス様のみもとにいつもあるのです。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日の礼拝を導いて下さり、ありがとうございます。この罪の赦しの出来事と讃美する人生が与えられた一人の人の物語、その出発点は、その人の中にではなく、他者にあったことを知って驚かされます。私たちも、誰かに助けられて、祈られて、今日この日があるということなのだと思います。教会がこれからも「祈る家」であり続けることが出来ますように。コロナの中で、私たちは横のつながりが持ちにくくなってきております。そこで孤独を感じる者たちも多いのです。どうか、祈りの中で、また具体的な関りを教えて頂きながら、ご一緒に救い主イエス様のみ前に進み出てゆくことをさせて下さい。主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。